

(国語科)

伝え合う活動を通じた自己やグループの思考力の育成 ～国語科の指導を通して～

大阪市立小松小学校 藤原 賢司

1. 研究主題設定の理由

本校では、「自ら学び、心豊かにたくましく伸びる子を育む」を学校目標に掲げ、楽しく学び、「生きる力」を育む教育活動の推進を目指している。本校の児童の現状を考えると、話し合い活動において、一人一人の意見や考えが十分ではなかったり、一方的に自分の意見を伝えたりと、友だちの意見から考えを深めるという話し合い活動までには至っていないという課題が見受けられた。そこで、令和2年度より話し合い活動に関する研究に取り組むことにした。最初の2年間は、話す力（発表する力）、聞く力に関する基礎的な指導方法の工夫について研究を進め、教師の指導力の向上をめざした。研究3年目からは、研究主題を「伝え合う活動を通じた自己やグループの思考力の育成」とし、さらに「国語科の指導を通して」を副題として、研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

令和3年度からの2年間の研究の課題として、話し合いに向けて、自分の考えを整理しなければ経験則や主観性が強くなってしまうことや、話し合い中の役割や進め方を内容に合わせて整理しなければ、話し合いの内容が少しずつずれて、まとまらなくなってしまうことがわかってきた。そこで、これまでの研究活動の内容をさらに進めるために、昨年度は「語彙力の育成」「論理的思考力の育成」「環境の整備」を研究の視点に加えて取り組みを行った。その中で、児童が自分の考えを叙述に基づいて表現する必要性を感じた。そして、今年度は児童が考えた内容を表現するために「書く力の育成」「根拠・理由・主張の3段階の意見作り」「伝え合う活動に適した話し合いの場の設定」に重点を置いて、授業作りに取り組んだ。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 自分が考えた内容を、正確に文章で表現するための「書く力の育成」

- 児童が自ら考えた内容を表現するための「言葉」を増やし、お互いの考えを明確に共有し合えるように、語彙を増やす。

【「ことばのてちょう」の作成】

説明文や物語文に含まれる言葉の意味を調べ、語彙を増やす。

児童の語彙を増やすことで、言葉に対する関心を高める。

- 正しい文法を理解して、自分の意見をより正確に伝えられる力をのばす。

【学習段階に応じた書き方の指導】

段落や学習内容を『一文まとめ』で書かせたり、文字数を指定したりすることで、文章を要約する力を育む。

視点② 「根拠・理由・主張」の3段階の意見作り

- 自分の考えがどこから出てきたものなのかを意識し、自分の既知知識や体験と照らし合わせながら説得力のある意見を生み出すことをめざす。

【学年や学習段階に応じた、客観的で論理的な思考を生み出すための授業作り】

根拠…自分の考えの拠り所、本文中からの引用

理由…既知知識や体験を通して、根拠と主張をつなぐもの

主張…自らの意見

ステップ1…低学年は根拠となる表現をおさえ、文章の内容について正しく読み取る。

ステップ2…中学年は根拠に理由を付け、自らの考えをまとめる。

ステップ3…高学年は理由を基に筋道を立てた意見を作る。

視点③ 伝え合う活動に適した話し合いの「場の設定」

- 話し合いの人数を、交流させる内容や単元の中の思考段階を考慮した上で、必要かつ適切な人数を調整する。

【「一人読み」の時間の確保（自己内対話）】

交流する時間を設ける前に、自分の意見を考え、まとめる時間を作る。

【他者との話し合い（他者対話）】

話し合いに必要なかつ適切な人数を調整する。ここでは、言語活動自体を目的とするのではなく、あくまで深い学びを実現するための手段であることを認識し、話し合い活動だけで学習活動を終わらせないようにする。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 新単元の物語文・説明文に入るときに、意味調べを行い、「ことばのてちょう」に記録し、1年間の記録を継続して残しておくことで、言葉に対する関心がこれまで以上に見られるようになった。また、文章の書き方、文章の型を学習したことで、話し言葉と書き言葉の違いを理解し、場面や状況に応じた適切な形の文章が書けるようになってきた。さらに、文字数指定など文章の書き方に条件を入れることによって、余分な修飾語や長い前置きなどの冗長表現が減り、シンプルで読み手が理解しやすい文章構造を意識するようになった。
- 文章の中から自分の考えの根拠を探すように言葉がけを行い、サイドラインを引くなどの活動を授業ごとに取り入れたことで、物語や説明文にある語句や文章の内容を意識して繰り返し読むようになった。その結果、文章全体の構成や流れを理解しやすくなったり、登場人物の心情を読み取りやすくなったりした。
- 根拠⇒理由⇒主張という流れで段階的に組み立てる活動によって、自分の考えが客観的になるため、それぞれの考えが共有されやすくなった。また、状況を整理して話し合うことで今の話し合い活動をどういう目的で行うのか、見通しを持ちやすくなった。また、役割を設定することで、話し合いが苦手な児童も、話し合いへの参加意欲が高まってきた。

(2) 今後の課題

- 文章を書くことができるようになってきたが、一度書いた自分の文章を見直したり、推敲したりすることは不十分であった。自分が書いた文章を自分で読み返したり、友だちとお互いの文章を読み合ったりする活動を、指導計画に組み込み、授業の中で実践を続けていく必要がある。
- 文章に書かれていない作者や筆者の思いや考えを、叙述を手がかりに読み取るところまでは到達できていない。今後は教材研究を行う上で、児童が想像力を働かすことができるように発問や授業展開に工夫を加えていく必要がある。
- 「意見を発表する」⇒「自分以外の人の意見を受け止め、比較する」⇒「自分とは異なる意見や反対の主張に対して自問し考えを広げ深める」の最終段階にいたるまでには、まだまだ経験が足りないと考えられるため、今後も取り組みを継続していく必要がある。